盲腸

横光利一

Ｆは口から血を吐いた。Ｍは盲腸炎で腹を切つた。Ｈは鼻毛を抜いた痕から丹毒に浸入された。此の三つの報告を、彼は同時に耳に入れると、痔が突発して血を流した。彼は三つの不幸の輪の中で血を流しながら頭を上げると、さてどつちへ行かうかとうろうろした。

「やられた。しかし、」とＦから第二の報告が舞ひ込んだ。

「顔が二倍になつた。」とＨから。

「もう駄目だ。」とＭから来た。

――俺は下から――と彼は云つた。

彼はもうどつちへも行くまいと決心した。死ぬ者を

見るより見ない方が記憶に良い。彼は三点の黒い不幸の真中(まんなか)を、円タクに乗つて、ひとり明るい中心を狙ふやうにぐるぐると廻り出した。血は振り廻されるやうに流れて来た。

――俺は下から、

――俺は下から、

下から不幸が流れ出す故に、頭の上の明るい幸福を追つ馳けるのだ――だが、廻れば廻るほど、彼に付着して来たものは借金だつた。――幸福とは何物だ？――――推進機から血を流して借金を追ひ廻す――その結果が一層不幸であると分つてゐても、明るい空(から)を追つか

け廻したそのことだけでも幸福だ。――それが喜ばしい生活なら、下から不幸が流れ出して了ふまで、幸福な頭の方へ馳け廻らう。――死ねば不幸はなくなるだらう。――死なねば、幸はなくなるまい。――四人の中で死んだ者が幸福だ。――誰がその富籤（とみくじ）を引き当てるか。――彼は競争する選手のやうに、円タクに乗つて飛んでゐた。

　と、Mが死んだ。

　彼は廻り続けた円タクの最後の線をひつ張つてMの病室へ飛び込んだ。が、Mの病室は空虚（から）だつた。医者が出て来て彼に云つた。

「今日、退院なさいました。」
「どこへ行つたのです？」
「さア、それは分りません。」
――それや、さうだ。
――だが身体の中で何の必要もない盲腸で殺（や）られる
と云ふことは？
――身体の中に、誰でも一つ、幸福を抱いてゐると
云ふことになつて来る。
　彼は円タクに乗つて、盲腸のやうな身体をホテルに
着けた。ホテルのボーイは彼に云つた。
「もう部屋は一つもございません。」

その次のホテルも彼に云つた。
「もう部屋は一つもございません。」
——死を幸福だと思ふものに、ホテルは部屋を借す必要は少しもない。
彼はまたぶらりと円タクの中へ飛び込んだ。
「どこへ参りませう。」と運転手は彼に訊いた。
「どこへでもやつてくれ。」
円タクは走り出した。彼は運転手の後から声をかけた。
「明るい街を通つてくれ、明るい街を。暗い街を通つたら金は出さぬぞ。」

――盲腸が円タクの中で叫んでゐる。
彼はにやりと笑ひ出した。
――此の盲腸は、今度は誰を殺すのだらう。
――だが、身体の中に、誰でも一つの盲腸を持つてゐると云ふことは？
彼は街路を、血管の中の虫のやうに馳け廻つた。だが、此の盲腸はどこへ行くと云ふのだらう。

底本：「定本横光利一全集　第二巻」河出書房新社
1981（昭和56）年8月31日初版発行
底本の親本：「文藝時代」
1927（昭和2）年4月1日発行、第4巻第4号
初出：「文藝時代」
1927（昭和2）年4月1日発行、第4巻第4号
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、旧字、旧仮名の底本の表記を、新字旧仮名にあらためました。
入力：高寺康仁
校正：松永正敏

ファイル作成：野口英司
２００１年12月11日公開
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。